

施設養護史から見る初期近江学園の実践 — 敗戦直後の設立から 1950 年代に着目して —

○ 京都大学大学院 野崎 祐人 (会員番号 009756)

キーワード：施設養護史、近江学園、糸賀一雄

1. 研究目的

実親と切り離された状態にある子どもを公的に保護・養育する「施設養護」の歴史にとって、敗戦直後から 1950 年代は戦災孤児や浮浪児を保護・養育するために施設が急増した一つの画期であった。この時期の施設養護を対象とした歴史研究は社会事業史領域や社会史・歴史社会学領域において蓄積があるものの（吉田 2018, 土屋 2014 など）、それらはいずれも制度・政策レベルや社会事業の専門家言説レベルに照準したものであり、乳児院や養護施設といった現場レベルにおける実践を描いたモノグラフは極めて少ない。

こうした研究状況を踏まえて本報告では、敗戦直後の時期に設立され孤児・浮浪児の養育に取り組んだ一施設である近江学園の設立から 1950 年代にかけての現場実践を、施設養護史の観点から跡付けることを試みる。近江学園は、1946 年 11 月に滋賀県大津市・南郷に設立され、1948 年 4 月に児童福祉法の施行に伴い滋賀県立の養護施設兼精神薄弱児施設として認可された施設である。創設者であり初代園長である糸賀一雄が後に「発達保障論」を提唱して「障害福祉の父」と呼ばれるようになり日本の知的障害者福祉をリードした人物として著名であるため、近江学園の実践は障害児教育、知的障害者福祉の文脈のもとで考察されることが多かった（京極 2014、蜂谷 2015 など）。しかし、近江学園は敗戦後社会にあふれかえった孤児や浮浪児を保護・養育することを第一の目的として設立された施設であることから、敗戦直後から 1950 年代の施設養護の現場の典型例として捉えることができる場でもある。本報告ではこうした観点から、初期近江学園を事例として同時代の施設養護の現場実践の特徴について考察することを試みる。

2. 研究の視点および方法

機関誌として近江学園から定期的に発行されていた『近江学園年報』（第 1 集のみ『近江学園報告書』）および『南郷』、糸賀一雄の著作が収められた『糸賀一雄著作集』を主たる一次資料として用いる。これらをもとに初期近江学園の実践のありようを跡付け、それが施設養護史の観点から見た場合いかなる特徴を持つのかを考察する。

3. 倫理的配慮

本報告は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」を遵守するものである。用いる史料について、『近江学園年報』『南郷』を学術目的に使用することに対して社会福祉法人大木会より許可を得ている。また、史料中には「精神薄弱児」「白痴児」など、現代の水準から見れば差別的ととられる表現が含まれているが、歴史的叙述であることを踏まえ原

則そのまま記述している。

4. 研究結果

主に以下3点に着眼して分析した。

1点目は、「家庭」の模倣についてである。石井十次の「岡山孤児院」や留岡幸助の「家庭学校」に代表されるような明治期の慈善事業の時代から、「新しい社会的養育ビジョン」によってその方向性が示されている現代にいたるまで、「施設養護」は常に「家庭的」という言葉を用いながら一般家庭を参照し模倣しようとし続けてきた。糸賀一雄の「児童にとって何よりも温かく楽しい、そして腹のくちくなる家庭でなければならない」という言葉に現れているように、このことは初期近江学園においても同様であった。近江学園における「家庭」の模倣の特徴はとりわけ、家庭に近い住居形態の重視、母親的役割を担う人物の重視、の2点に求められる。

2点目は、知能検査の影響についてである。敗戦直後に孤児や浮浪児となった子どもたちに対する保護・処遇の大きな特徴として、児童相談所が設置されて（設置当初は「児童鑑別所」と呼ばれた）子どもの記憶力や推理力を客観的に図るための知能検査の実施が義務化され、子どもがその知能程度に応じた種別の施設で養育・教育されるようになったことが挙げられる（土屋 2014）。「戦災孤児・生活困窮児」のための第一部と「精神薄弱児」のための第二部とを併せ持っていた近江学園において、知能検査の結果は子どもへのまなざしや養育・教育のありようをどのように変容させたのか、そのプロセスについて詳述する。

3点目は、創設者糸賀一雄の思想・養育方針についてである。宗教哲学や京都学派の哲学にも影響を受けつつ形成された糸賀の思想やそれに基づく養育のありようは、これまで障害児教育、知的障害者福祉といった文脈において分析・評価されてきたが、施設養護史の中ではどのように位置づけるのかを検討する。

5. 考察

本報告において、初期の近江学園の実践は施設養護史の観点からはいかに特徴づけられるかの一端を示すことができた。同時代の一般的状況に迫るために他施設の調査も行うこと、またこれ以降の時期の近江学園の実践も施設養護史として見た場合にいかなる特徴を見出せるかを検討することを今後の課題としたい。

文献（登場順）

- 吉田幸恵(2018)『社会的養護の歴史の変遷——制度・政策・展望』ミネルヴァ書房。
土屋敦(2014)『はじき出された子どもたち——社会的養護児童と「家庭」概念の歴史社会学』勁草書房。
京極高宣(2014)『障害福祉の父——糸賀一雄の思想と生涯』ミネルヴァ書房。
蜂谷俊隆(2015)『糸賀一雄の研究——人と思想をめぐって』関西学院大学出版会。